

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 矢作川流域のギフチョウとカンアオイ
- 兜岩こぼれ話
- 連載 矢作川のいきもの 1
カワヒビミドロという藻のお話
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

5
2002 May
No.49

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

矢作川流域のギフチョウとカンアオイ

小林広成

猿投山が春霞にけぶるころ、山麓の雑木林は、ツツジやスミレなどの花々で美しく彩られます。時を同じくして現れるのが、「春の女神」と言われる美しい「ギフチョウ」です。

アゲハチョウの仲間としてはやや小型な方ですが、その羽根(翅)の美しさは、華麗な数々の蝶の中でも抜きん出ていると思います。黄色と黒色のだんだら模様を基調として、赤、青、さらに橙色を配した色彩のバランスは、絶妙といってもいいでしょう。

ギフチョウは、西三河北部ではまだ割合に見ることができる、矢作川流域の里山を代表する蝶と言ってもいいと思います。しかし、全国的には数の少ない非常に貴重な種類です。

「ギフチョウ」の幼虫時代の食草は、ウマノスズクサ科のカンアオイの仲間です。この食草の分布は、面白いことに矢作川を境にして、西側は一部にヒメカンアオイ(以下ヒメと記す)との混生地があるものの、スズカカンアオイ(以下スズカと記す)が圧倒的に優勢です。一方、東側では大部分がヒメで、スズカはほとんど見ることがありません。矢作川を境にして、まるで棲み分けているような気がして、興味深いものがあります。

ヒメは明るい雑木林の林縁や土手に好んで群生する

のに対し、スズカは、笹の中や杉の植林地林縁でも少なからず見られます。スズカは日差しを求めての群生よりも、日陰を厭わぬ拡散の道を選んだような印象があります。この違いが矢作川流域のギフチョウの分布に多少なりとも影響を与えているのかもしれませんが。

いずれにしても、カンアオイの仲間は繁殖力の非常

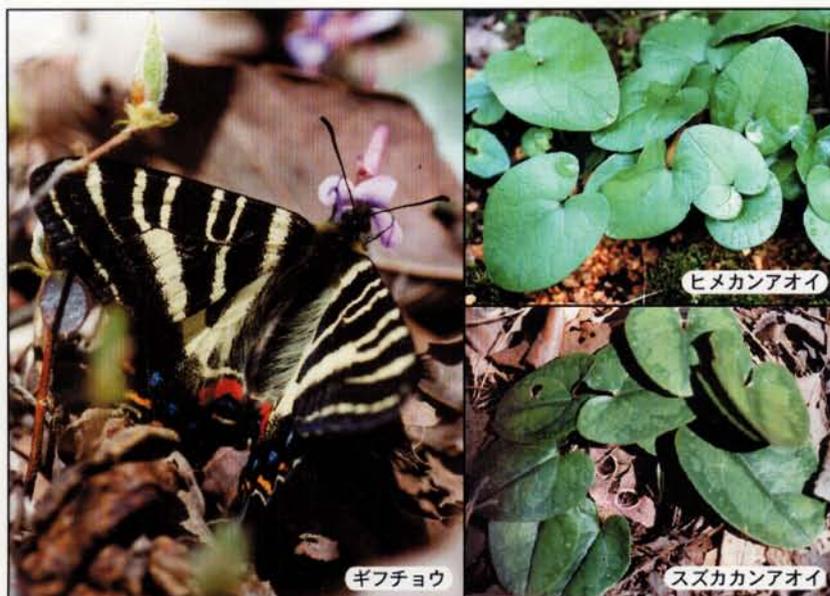
に弱い植物なので、自生地がいったん整地等開発の対象となると、これを食草としている「ギフチョウ」とともに、簡単に絶滅してしまいます。かつて矢作川東部地域で、ヒメを食草として棲息していた多くの「ギフチョウ」は、近年その影すら見ることはできません。

一方、猿投山の長

い裾野が広がる西部地域では、昨年の大発生に続いて今年も随分多くの「ギフチョウ」を見ることができました。しかし、最近インターネットの普及等による情報交換が容易になり、各方面からマニアが大勢押し掛けて、乱獲が心配されます。が、それ以上に生息地の環境破壊の方がもっと心配です。

雑木林の中の日溜まりを求めてさまよう、柔らかで繊細なこの愛らしい蝶たちが、いつまでもヒラヒラと舞い続けられるよう、祈る気持ちでいっぱいです。

(こばやし ひろなり、日本鱗翅学会 会員)



旭町への街道の難所だったという兜岩。

愛知県豊田土木事務所（当時）の職員には、県道豊田明智線の道路改良でひどく苦勞、どころか死にそうな目にあった人もいます。兜岩は祟るのです。

兜岩にまつわるエピソードを二つご紹介します。

平成5年のわかしゃち国体の準備で県内各地があわただしい頃、旭町の青少年元気村で全国大会が開かれるとかで秋篠宮ご夫妻がお見えになる直前、兜岩の下で落石がありました。マイクロバスほどの、2車線道路をふさぐ大きさの石でありました（写真が残っていないのが残念）。それから、こんな危険な道路があるのかと大騒ぎになりまして、とにかく何でもいから山の中の石を固定せよということになりました。

旭町地内の矢作川沿いの5kmの間、あそこは山の中に入ると凄いです。落ちそうな石の巣くつです。道路の上の山の斜面の落石対策を大急ぎでやりました。山の地主に断りをいれまして、皆で手分けして石に金網をかけるやら、ロープを巻き付けるやら。

あの石や金網やロープはどうなったかなあ…。まっ、やったことは良いことなので、見逃してもらえるでしょうか。

兜かぶと岩いこぼれれ話わ

板
沢
幸
夫

もう一つ。

兜岩の下の県道は北向きなので冬は路面に日があたりません。道路も急勾配でカーブしています。兜橋ができてから凍結によるスリップ事故が多発しまして対策をしました。そこで、兜橋の路面に電気ヒーターを入れたのです。一冬の電気代もかなりだと思います。

その前後の道路はどうしたかと言いますと、当時どういう議論があったかわかりませんが、薄い舗装を縞状に設置しました。下り方向の路面を凹凸にして速度を落とさせるというやつです。冬場の凍結対策なら、期間限定の現象なので、路面温度表示をすとか、速度に対する警告をすとか、もっと良いやり方があると思います。

通るとわかりますが、不陸*が大きい。長い。大変です。静かな山あいに変な音は響きわたるし、通る人には気の毒です。でもこの位はがまんしなくてはいけないのでしょうか。街道の難所で、昔の人は命が危なかったんですから。

やはり兜岩は祟ります。

（いたざわ ゆきお、愛知県西三河建設事務所
総務課 主任専門員）

*不陸 … 地面が平らでなく、凹凸がある状態。
「土木用語大辞典」（技法堂出版）より



兜岩（遠景）

カワヒビミドロという藻のお話

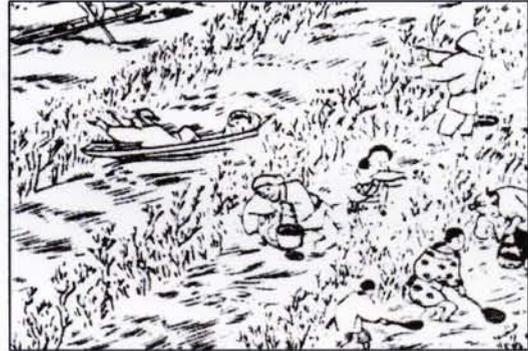
内田朝子

矢作川中流域、古岸^{ふるがき}周辺などでは、初夏や秋の頃に、しばしばカワシオグサという糸状緑藻（糸状の形をした緑色の藻）が大発生します。豊田市矢作川研究所では、カワシオグサの発生要因を調べるため、矢作川の上流から下流までの全域を対象に、いつ、川のどのようところで、どんな種類の糸状緑藻が発生しているのかを調査しています。

調査を進めていると、矢作川で発生する糸状緑藻はカワシオグサだけでなく、他に数種類あることがわかりました。

矢作川の上流域にある旭町の池嶋では、春先にカワヒビミドロという糸状緑藻が発生し、去年は川底一面を覆い尽くすといってもよいほどに大発生しました。この種は矢作川の源流近く、愛知県と長野県の境に位置する大野瀬でも、同じく春先に発生していました。カワヒビミドロは山間の溪流、湧泉、湿原の池沼といった水の冷たいところや平地の池沼、河川で水温の低い冬期に発生する種類です。とても美しい緑色をしていて、手でつまむと、とろろ昆布のように細くやわらかい感触があります。この藻を顕微鏡でのぞくと、漢字の「日」という字が縦に繋がったように見えるので、ヒビミドロとは「日々ミドロ」ということなのだ、なるほど！と、一人合点していました。一方、友人の藻類研究者のN氏は、カワヒビミドロが石の上に生えると、石にひびが入ったように見えるのでこの名がついたのだらうと推測していました。

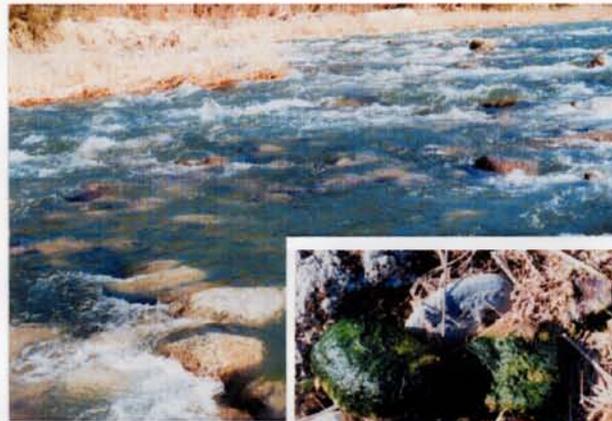
しかし、この『ヒビ』は『筵』と書いて、海で海苔や牡蠣^{かき}に付着させるために立てておく粗朶^{たか}を指しています。海の筵に緑色の綿毛状になって付着するのでヒビミドロという名前が付いているそうです。海で発生するヒビミドロと同じグループの種類が淡水の川でも発生しているので、川を付けてカワヒビミドロという名前になったのです。



筵（東海地名所図会
「日本語大辞典 第17巻」
（小学館）より転載）

カワヒビミドロの名前をめぐる我々の推理はみごとにはずれていました。

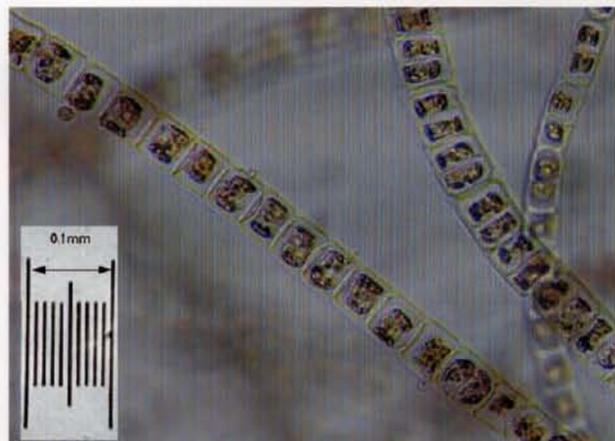
（うちだ あさこ、豊田市矢作川研究所 研究員）



旭町 池嶋（2000年1月）



カワヒビミドロの大発生状況



カワヒビミドロの顕微鏡写真



4月8日(月)

古川プロジェクトの聞き取り調査のために、扶桑町に行つて来ました。今回の調査では、昭和16年前後から50年代にかけて、扶桑町の方々が川とどのように接してきたかを伺うことができました。学校にプールが出来る前は大勢の子どもが泳いでいた話やお蚕の道具を洗っていた時の話など、日常生活でいかに矢作川との関わりが深かったかをしみじみと感ずることができました。(小川)



昭和44年 扶桑町、故・築山岡次郎さん撮影現在の古川水辺公園の位置から上流平戸橋方向を望む。

今月の一枚



古川のヤマセミ
(猪狩 敦史氏 撮影)

研究所の調査風景

して残されたアカマツ主体の雑木林でのエクスカージョンに参加し、関東地方との共通性が高い里山を視察してきました。(洲崎)



ため池と雑木林 (仙台市郊外 水の森公園)

3月26日(火)~30日(土)

仙台の東北大学で行われた、第49回日本生態学会大会に参加してきました。河川生態に関する発表は多数ありましたが、なかでもシンポジウム「生態系間の相互作用」における、鳥類を介した河川から陸上という通常と逆のパターンの物質移動に関する報告は興味深いものでした。また、最終日にはため池の水源林と

編集後記

今年度から「川を活かした街づくり」のための事業が始まり、関連の文献を集めていますが、その多さに驚いています。様々な地域に共通した問題意識があるようです。とある本の一節に「人はある街を訪れるとそこにしかないものに行く。それは川や海である。今までは店などだったが逆転してきている」とありました。土地の人も他所の人も引きつける、魅力的な街の景観を考えていきたいです。(洲)



2001.9.22 家下川(豊田
市鷺鴨町治林)で捕獲(南
米原産)。頭胴長50cm。
(捕獲・撮影 小嶋 正徳氏)

ご意見・ご感想をお寄せください